

2024年9月9日 <計3枚>

報道機関 各位

京都橘大学広報課

たちばな教養学校 Ukon 第4期生（2024年度後期受講生）
多彩な講師陣をお迎えし、9月7日（土）より申し込み受付開始！
「書く——自分の足で一步を踏み出す」をテーマに全8回開講します。

第4期（2024年度後期）の講師8名が決定し、9月7日（土）より申し込み受付を開始します。多彩な講師陣をお招きし、「書く——自分の足で一步を踏み出す」をテーマにお話しいただきます。

Ukon 第3期は「読む——新たな『ことば』を探す旅」と題して、本を読むだけでなく、時代を、風景を、音楽を読むなど、さまざまな「読む」世界を覗いてきました。

読むことは、すなわち自分の言葉をつむぐこと＝「書き出す」ことに他なりません。それを「どう書くか」が次に続く問題です。叙述のスタイルはさまざまですが、Ukonは日常の営みのなかで感じること、考えること、人との関わりの中であって受けとめた何かを、より深く確かなものにするための気づきと学びの場です。目的や個性に応じて、自分によりふさわしい「文体」に出会うためにはどうしたらよいか。8人の講師それぞれの「プロの流儀」を通して、そのヒントを探ります。

京都橘大学（京都市山科区、学長：日比野英子）では、「生きる」ことを深く味わい、人生を豊かにするための学びの場をめざして、公開講座「たちばな教養学校 Ukon（ウコン）」を2023年5月より開講しています。Ukonの学頭・河野通和氏（編集者・読書案内人・本学客員教授）は、各授業において、学びのナビゲータを務めます。どなたでもご参加いただける公開講座です。

たちばな教養学校 Ukon
第4期
(全8回)
申し込み
受付中

古賀史健
酒井順子
グレゴリー・ケズナジャット
吉原真里
松村圭一郎
湯澤規子
鈴木忠平
梯久美子

開催日時：2024年11月9日（土）～2025年3月8日（土）の期間における全8回

開催場所：QUESTION 7階「クリエイティブ・コモンズ」京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町 390-2

定員：各回100名（先着順）、対面

受講料：全8回一括お申し込み 15,000円、各回お申し込み 1回 2,500円

申し込み方法：たちばな教養学校 Ukon 特設サイトよりお申し込みください。

講師：別紙をご参照ください。

Ukon 特設サイト



●取材・内容についてのお問い合わせ先

京都橘大学広報課 担当：前川 TEL.075-574-4112

1. 全体テーマ：書く——自分の足で一歩を踏み出す

2. 第4期授業概要について（開催日時、テーマ、講師、プロフィール）

	開講日時	テーマ	講師
1	2024年11月9日(土) 14:00～15:30	書くことで救われる自分がある	古賀 史健
2	2024年11月22日(金) 19:00～20:30	人はなぜエッセイを書くのか	酒井 順子
3	2024年12月13日(金) 19:00～20:30	母語の外へ出る旅に	グレゴリー・ケズナジャット
4	2025年1月17日(金) 19:00～20:30	マイノリティという立ち位置	吉原 真里
5	2025年1月31日(金) 19:00～20:30	フィールドノートって、どう書くの？	松村 圭一郎
6	2025年2月14日(金) 19:00～20:30	見過ごされてきた女性の物語を紡ぐ	湯澤 規子
7	2025年2月28日(金) 19:00～20:30	人間ドラマのおもしろさ ——ワトスン、ホームズの謎に迫る	鈴木 忠平
8	2025年3月8日(土) 14:00～15:30	アンパンマンの生みの親、やなせたかしの原体験	梯 久美子

【プロフィール】

① 古賀 史健（こが・ふみたけ）：ライター/株式会社バトンズ代表

1973年福岡県生まれ。2021年に batons writing college を開校。主な著書に世界累計1100万部のベストセラーとなった『嫌われる勇気』、『取材・執筆・推敲』、『20歳の自分に受けさせたい文章講義』など。最新刊は『さみしい夜にはペンを持って』（小学館児童出版文化賞ノミネート）。

② 酒井 順子（さかい・じゅんこ）：エッセイスト

1966年東京都生まれ。高校時代、雑誌「Olive」にコラムを書いてデビュー。大学卒業後、広告会社勤務を経て、執筆に専念する。著書に『負け犬の遠吠え』、『百年の女「婦人公論」が見た大正、昭和、平成』、『家族終了』、『女人京都』、『日本エッセイ小史』など。

③ グレゴリー・ケズナジャット：作家/法政大学グローバル教養学部准教授

1984年アメリカ生まれ。2007年来日、2017年同志社大学大学院文学研究科国文学専攻博士後期課程修了。谷崎潤一郎を中心にした日本文学を研究。2021年に『鴨川ランナー』で第2回京都市文学賞を受賞し、作家デビュー。2023年『開墾地』が第168回芥川龍之介賞候補作となる。

④ 吉原 真里（よしはら・まり）：アメリカ文化研究者/ハワイ大学・東京大学教授
1968年ニューヨーク生まれ。アメリカ文化研究を専門とし、英語と日本語の両方で研究・執筆活動を行う。日本語の著書は『「アジア人」はいかにしてクラシック音楽家になったのか?』『親愛なるレニー レナード・バーンスタインと戦後日本の物語』『不機嫌な英語たち』など多数。

⑤ 松村 圭一郎（まつむら・けいいちろう）：文化人類学者/岡山大学文学部准教授
1975年熊本県生まれ。エチオピアなどをフィールドに、所有と分配、海外出稼ぎ、市場と国家の関係などについて研究。著書に『所有と分配の人類学』、『うしろめたさの人類学』、『くらしのアナキズム』、『人類学者のレンズ』、『これからの大学』、共編著に『文化人類学の思考法』など。

⑥ 湯澤 規子（ゆざわ・のりこ）：歴史地理学者/法政大学人間環境学部教授
1974年大阪府生まれ。「生きる」をテーマに近代日本史の日常を問い直すフィールドワークを重ねる。著書に『胃袋の近代 食と人びとの日常史』、『「おふくろの味」幻想 誰が郷愁の味をつくったのか』、『焼き芋とドーナツ—日米シスターフッド交流秘史』で第12回河合隼雄学芸賞を受賞。

⑦ 鈴木 忠平（すずき・ただひら）：ノンフィクション作家
1977年千葉県生まれ。日刊スポーツ新聞社、文藝春秋 Number 編集部を経て、ノンフィクション作家に。『嫌われた監督 落合博満は中日をどう変えたのか』で大宅壮一ノンフィクション賞、本田靖春ノンフィクション賞などを受賞。最新刊は『いまだ成らず 羽生善治の譜』。

⑧ 梯 久美子（かけはし・くみこ）：ノンフィクション作家
1961年熊本県生まれ。編集者を経て、初の単行本『散るぞ悲しき—硫黄島総指揮官・栗林忠道』で大宅壮一ノンフィクション賞受賞。以後、人物評伝を中心に執筆。主著に『狂うひと—「死の棘」の妻・島尾ミホ』、『原民喜 死と愛と孤独の肖像』など。20代のころ薫陶を受けたやなせたかし氏の評伝を執筆中。

3. 学頭・河野通和（こうの・みちかず） プロフィール

1953年、岡山市生まれ。東京大学文学部ロシア語ロシア文学科卒業。1978年、中央公論社（現中央公論新社）入社。おもに雑誌編集にたずさわり、「婦人公論」「中央公論」編集長を歴任。新潮社にて季刊誌「考える人」編集長を務めた後、株式会社ほぼ日入社。「ほぼ日の学校（のちに学校）」初代学校長を務める。2022年4月より、京都橘大学客員教授。著書に『言葉はこうして生き残った』（ミシマ社）、『「考える人」は本を読む』（角川新書）がある。読書案内人・編集者として活動中。

4. お問い合わせ先

たちばな教養学校 Ukon 事務局（京都橘大学 生涯教育・通信教育課）

TEL:075-574-4335

MAIL:ukon@tachibana-u.ac.jp

以上